会員の広場

「書評のあり方について」について思う

本誌の1993年8月号の本だな欄に掲載された筆者の「最新気象の事典」の書評について，根本順吉氏から批判が寄せられたので，貴重な紙面をお借りして筆者の思いを述べる．

根本氏は，「気象の事典は個人の著作ではないのだから，僅かな項目の紹介をするのではなく，この事典がどのように編集されているか，今後一つの基準として使用に耐えうるものかどうかを批評すべきであり，中井の批評はこの点が抜け落ちた見当違いのものである」から始めて，あとは総て「最新気象の事典」の超辛口の批判となっている．

筆者が天気の編集委員会を通じて本事典の書評執筆依頼を受けたころ，根本氏の『緊急書評・「最新・気象の事典」を読む』が気象庁OBの同人会誌「きしょう春秋」に掲載されはじめた．筆者もそれを読み，「非常に辛らつな批評だな，同人会誌といえども多くの人が読むのだから，名指しで批判している人とは事前に議論を済ませているだろうか」といらぬ心配をした．同時に，同じことを批評するにしても，書き方次第で読者の感じかたが変わるものである．最初に，「批評のなかで挙げられた個人名は枝葉末節で特に個人攻撃をするつもりはない」とことわっているものの，なかには予見と偏見で論じていると感じられる箇所が見受けられ，読後にスカッとした感じは得られなかった．

こうしたことから，筆者の書評は根本氏のものとは全く視点を異にして，非常によくまとめられていると率直に感じた項目を中心に紹介することにした．この点が，根本氏に「見当違い」と指摘されているわけだが，筆者は根本氏のように，事典の書評だから編集のあり方にまで言及しなければならないとは考えなかったのである．今回，本欄に投稿された根本氏の指摘のなかには筆者も同感のものもある．誤植をできるだけさけること，項目ごとの記述内容に予盾がないことは事典の編集上非常に大事なことであるが，その他のことについては書評者によって見解が分かれても当然であると考える．また，書評の原則についても意見は分かれよう．今回の書評を書くにあたって，筆者には本事典を根底から批判する気はなかったので，根本氏からみれば「物足りない，見当違い」の批判となったのであろうが，事典の書評はどうあるべきかの結論をここで出す必要はないと考える．

（気象庁観測部　中井公太）